

本を選ぶ

高校図書館版

NO.73 2022年(令和4年)5月20日
<https://www.las2005.com>

●発行/ライブラリー・アド・サービス
〒114-0002 東京都北区王子 4-23-4 TEL=03-6908-4643

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

わたし、気になります！

高宮 光江

3月1日「白線流し」が行われる。卒業生がセーラー服のスカーフ、学生帽の白線をクラス毎に結び繋げてともに川に流す。「巴城ヶ丘別離の歌」の曲に合わせ、雪もちらつく飛騨高山の風物詩だ。職場の同僚から「白線流し、見ていたよ」と声を掛けられた。母校での行事がドキュメンタリーとして取り上げられ、やがてスピッツ「空を飛べるはず」の曲と共に人気の連続ドラマシリーズとなっていた。だが、まだ安房峠が難所で飛騨高山と東京へのバスさえ通らない時代ゆえドラマロケ地は長野県だった。

私は卒業して暫くして、自宅に学校図書館に返却し忘れていた図書を見つけた。図書館員として申し訳ない。高校へ返却しに行った。そして学校図書館に入った途端、驚いた。そこは在校時期とはまったく違う楽しい図書館に変貌していた。伝説の名物司書小池静子さんがいた。『教育を変える学校図書館の可能性 子どもたち一人ひとりが主人公 司書のいる学校図書館2 (みんなの図書館双書 10)』1998年に「学校図書館の可能性-斐太高校訪問記」でも紹介されている。小池さんは、生徒が抱く興味関心に応える心地よい居場所づくりとして尽力した。何を基準に本を選ぶか、選書論争がある中で、小池さんは生徒のリクエストに応え、当時話題となったあの写真集を買う英断をしたという。

その影響かどうか、後輩にあたる世代から作家が誕生している。『黒牢城』で直木賞を受賞した米澤穂信は『氷菓』でデビューした。古典部の千反田えるが「わたし、気になります！」と事件に立ち向かう青春学園ミステリー作品は、その後テレビアニメとなった。京都アニメーションが生み出す美しい映像は、高山市立図書館「煥章館」などアニメ聖地巡礼ブームとなった。大沼紀子の『真夜中のパン屋さん』はテレビドラマとなり、『ゆくとしくるとし』で坊ちゃん文学大賞を受賞している。

本棚から手にした本がちょうど自分が今探している問題を解決するために役立ったという面白い経験がある。今働いている図書館は、学校図書館でふと開いた本から見つけた存在だった。こんな図書館があるのか。今と違いネットや情報も十分ない中で、たまたま受けて運よく合格して進んだ道だ。図書館で過ごした経験は、知らない世界へ飛び立つ大きなスプリングボードとなる。

学校図書館は青春学園を描いたドラマや映画でも、重要な手がかりを見つける場所として登場する。阿刀田高『あやかしの声』のように呼び寄せられたのか。司書や先生や生徒が本を選び発信する過程があることで、学校図書館は知のキャッチボールをしながら成長していくだろう。あなたの選書を本棚に入れることで、誰かを引き寄せている。自分の居場所を探している生徒は、図書館から何かを必ず得ていくのだろう。

学校図書館から物語が生まれていく。記憶は本に挟まれて、そして誰かが頁を開いた瞬間に甦るその時を待つように。 (たかみや みつえ)

「14歳の世渡り術」ができるまで、できてから

高野 麻結子

今年で15年目のYAシリーズ

「14歳の世渡り術」は、「知ることは、生き延びること」というキャッチコピーのもと、2007年に創刊されたシリーズです。読んだかたが自分の物差しで世の中をとらえ、生きる術を身につける一助になることを目指した結果、扱う範囲は受験や進路、恋愛、人間関係の悩みから貧困や不登校、依存症といった社会問題まで幅広く、メイン読者のヤングアダルト層（13～18歳の中高生）はもちろん、大学生や大人が学び直しに、と手に取ることも少なくありません。今年で15周年を迎え、90点を超えるラインナップになりました。これまでに『建築家になりたい君へ』（隈研吾）、『科学者になりたい君へ』（佐藤勝彦）、『夏目漱石、読んじゃえば？』（奥泉光 / 香日ゆら）、『いつかすべてが君の力になる』（梶裕貴）などを刊行してきました。

「企画会議通過」が最初の登竜門！

現在、14歳の編集会議は毎月1回、月末に近い金曜日に行われます。メンバーの構成は20代から40代までの編集者男女9名。翻訳課、日本文学課など、異なる所属部署を越境して会議室に集まります。我が社の特徴でもありますが、編集部内の所属を問わず企画提案・編集を担当できるため、翻訳課の編集者が日本人作家の文庫を担当したり、日本文学課にいながら翻訳もののマンガを作る、というケースもよく見られます。社内30人強の編集者が各々の小さな畑で季節や需要に合わせて野菜を作っているようなイメージでしょうか…。いやむしろ1冊1冊の本は、誰かの手元に届き、芽生えるのを待っている精緻な種（タネ）と言えるかもしれません。

1つの企画が14歳編集部の会議を通過すると、その先は編集部長会議→各部署のトップが集まる最後の企画会議へと進み、3段階の検討を経て、晴れて本作りのスタートラインに立ちます。ここまで来ると、当初は焦点が絞り切れていなかった読者層や

ちょっと間延びしたタイトル案、カタブツそうな章見出しも、各所からの助言、懇願、叱咤、激励を経て、満身創痍…いやいや、どこに出しても恥ずかしくない、キリッとした1人前（1冊）の設計図になっているのです。

10代の声、大人の声

正直に申し上げますと、10代向けの本作りは、大人に向けた企画より数段の難しさを皆感じています。私たちはもう10代ではないのですから。かつて自分が通った道——受験も、進路選択も、家族や友達とのトラブルも、嫌というほど経験したはずなのに、当時の話を親から聞いても、昔の日記をひっくり返しても、あのモヤモヤと発酵した光のようなものははっきり姿を見せません。近隣の学校のスクールカウンセラーさんが、編集部のメンバーに出勤授業を行なってくれたこともありました。今の10代が経験した東日本大震災やコロナ禍による休校・リモート授業が、心の成長にどんな影響を及ぼしているか。学校の先生が生徒さんを引率して遊びに来てくれた際には、グループに分かれてお悩み交換もしました。

取り纏めを行う立場を通して自分なりに理解したのは、10代向けの本作りには2種類あるということ。それは「10代の声を聞く」と「大人の声を届ける」ことです。「求められている本を作る」と「読んでほしい本を作る」とも言えます。前者なら悩みに寄り添い、学校では教わる機会のない切り口で知りたいことや解決策を紹介する。後者は、自殺や貧困や戦争といった今の社会で起きている問題を、10代と結びつけて新たに提示する方法です。

「科学者になろう」と思ったことはないけれど

2021年の青少年読書感想文コンクールの高校の部の課題図書になった『科学者になりたい君へ』という本があります。大人側からの企画立案の例としてご紹介します。著者の佐藤勝彦先生は、宇

宙のなりたちを研究されている宇宙物理学者です。

数学も物理も苦手だった高校生の私は、早々に理系の道を消し去って大学の文学部に進みました。しかし相当後になってから気づいたのは、世の中は文系/理系では決して分けられないということ。その2つで人生を1/2にすると、世界を受け止める態度も態度も1/2になってしまうということでした。



進路選択や将来の夢を描く時、子どもは周囲の大人の影響を受けてしまいがちです。でも、そんな時こそ本の出番です。図書館や図書室、本屋さんに足を運べば、無数の人生がそこにあります。1冊の本を通して、未来の自分のシミュレーションができれば、「もしも」の道が1つ増えます。そんな想いで先生に出版のご相談をしたところ、「私にも高校生の孫がいるんですよ」とお引き受け頂けたのです。

この時、佐藤先生と一緒に決めた目標は「科学者にならない子にも読んでもらえる本を作ろう」でした。謎かけのようですが、科学者を目指して実際に科学者になれる人はわずかです。でもその道のりや葛藤と、関わる人たちが織りなすドラマも見せられれば、その世界は今見えている世界と地続きであることを知ってもらえるのでは…という想いで本は形になっていきました。課題図書として、さらに多くの方に手にして頂けるチャンスが生まれたのは不思議で嬉しいご縁でした。

10代に「世渡り」なんてばかげてる？

シリーズ創刊からこれまで、何人かの方に「自分は「世渡り」という言葉は嫌いです。だからこのシリーズで書くことはできません」というお断りを頂きました。「世渡り」を辞書で調べると「世間でう

まく立ち回ること」「処世」という言葉が並びます。実際、シリーズ創刊の企画段階でも「中学生に“世渡り”なんて早い」と、社内で猛反対を受けました。しかし当時行った中学生へのアンケートには、親や友達といった身近な人間関係や進路に悩み、何とか良い方法を見つけたい、変わりたいとする10代の切実な声が記されていたのです。

磯辺のヤドカリが成長につれ、自分のサイズに合う殻へと住み替えるように、生きる世界のサイズは経験の多寡や年齢、価値観によっても多様です。小さければ小さいなりの住み心地の悪さ、息苦しさがあり、次のステップに進む、新しい世界に出会うために、束の間しのぐ術を身につけることは欠かせないと考えています。

これから

今年1月には翻訳書に限定した「14歳の世渡り術プラス」というサブレーベルを立ち上げ、イギリスの教育者による『10代で知っておきたい「同意」の話』を刊行しました。各分野の第一線に立つ日本の書き手に



加えて、異なる環境に生きる方々の考えからも学べるシリーズに広げたいと考えています。

創刊から15年が経ち、皆が同じものとして捉えていたはずの「世界」は、時々刻々と姿を変えています。将来どんな仕事に就き、いつまで働くのか、どこでどのように生きていくか、といった考え方や選択肢の変化も顕著です。そんななかで、私たち大人が次の世代にできることはいったい何だろう…と考えます。自分たちが培った知恵や経験という道具を差し出して、そこから使えるものを選び取ってもらうくらいなのではないかと思っています。

新しい時代に生きる方々に向けて緊張感を持ちつつも、出版に携わる人、誰もがにやける魔法の言葉「こんな本、ほしかった！」をかけてもらえるよう、これからも皆で多彩な本作りに挑戦して参ります。(たかのまゆこ：河出書房新社)

生徒の心に種を蒔く

—— 読書活動と探究学習を通して

長沼 祥子

「読解力」を補うコグトレ

本校には、日本語を母国語としない生徒以外にも、「特別な教育的ニーズ」のある生徒が在籍しています。発達障害と見受けられる生徒もいますが、そのような生徒達は案外読書家な場合が多く、発達障害とまではいかない境界知能に近い生徒達が認知機能が低く、本を読むことが困難である場合もあります。このように、認知能力が低いことが読書へのハードルになっていると気づくきっかけになった本が『ケーキの切れない非行少年たち』（宮口幸治 著／新潮社／2019年）でした。この本で紹介されているコグトレ（認知機能強化トレーニング）が学校設定科目の中に導入されたため、図書館でも情報を収集し、先生方へ情報発信しています。

私自身も「読解力」について勉強していくなかで、認知能力を高めることが生徒の「読解力」を高めることにつながり、読書による取り組みが認知機能強化トレーニングになり得ると考え、コグトレ研究会に入会して勉強をしています。オンライン上のワークショップが開催された際は、先生方へも声掛けして一緒に参加し、全教員を対象としたコグトレ研修会を協同で開催しました。

読書とコグトレをうまく組み合わせ、インクルージョンの考えに基づいた読書による取り組みを生み出していければと考えています。

本との出会いをプロデュース

ここまで、読書が苦手な生徒に向けての支援について触れてきました。本校には、読書が苦手な生徒がいる反面、それなりに読む力がある生徒もいて、興味を刺激すると思いがけず名作を読んでもくれる場合もあります。例えばライトノベルばかり読む生徒は、実は結構読む力があるので、「ロリータ・コンプレックスの語源になった本だよ」とナボコフの『ロリータ』を紹介したら、即座にリクエストし、授業のビブリオバトルで紹介するほど読み込んでくれたことがあります。最近では TikTok の本紹介動画

の影響で「なぜこれを高校生が!?!」という本を読む生徒もいます。

動画クリエイターのけんごさんもおっしゃっていましたが、若者が本を読まないのは知るきっかけが少ないからであり、きっかけさえあれば生徒は読むのです。生徒に読んでほしい分野と生徒が好きなサブカルチャーを組み合わせる書架や展示を作ったり、ボードゲームや「これも学習マンガだ!」を活用したりするなど、工夫次第できっかけは作ることが出来ます。

連携でひろがる読書の輪

自分一人のアイデアでは限界がありますが、様々な機関と連携することで、読書のきっかけ作りの幅が広がります。例えば、私は埼玉県内の高等学校と特別支援学校に勤める教職員・学校司書で構成している研究団体、埼玉県高等学校図書館研究会の中の読書指導委員会に所属していたことがあります。この委員会では、司書と教員が各校の読書の取り組みを紹介し合いながら、生徒の「読む力」を育む読書について意見を出し合い、生徒と本を結びつけるアイデア・プログラムを考える活動をしています。その活動の中で、イシス編集学校様の「探究型読書 本の帯作りワーク」のワークショップを本校の教員と体験し、授業実践をすることになりました。

この「本の帯作りワーク」は、新書を未読のまま行うワークで、目次読み等の工程を経て、本のキーワードや気になる言葉を抜き出し、「編集思考素」と呼ばれる型に当てはめ、要約文・キャッチコピーを作成して本の帯にします。本の内容・構成を理解するだけでなく、生徒の思考・創造を促す内容となっています。また、帯のデザインはPC作業で、情報科と連携して行い、完成作品は職員室前や図書館で展示して人気投票を開催し、教科横断的な取り組みを実現させました。課題はありますが、生徒にも好評で継続して行っている授業となっています。また、昨年度初めて地元の熊谷市立妻沼図書館とコラボレーションして、完成した本の帯と新書の展示をさせていただきました。利用者の方々にも大変好評で、普段借りられない新書がすぐになくなってしまった、とのことでした。普段新書を読まない生徒、

さらには地元の方々に新書を手にとってもらうきっかけ作りができた貴重な取り組みとなりました。

点検読書で探究学習

また、読書指導委員会では、「新書の点検読書」にも力を入れています。「新書の点検読書」とは新書を用いたつまみ読みワークで、ワークシートに沿って書誌事項や構成を確認したのち、まえがきやあとがきを読んで「著者の伝えたいこと」の抜き出しに挑戦、その上で「読みたいかどうか」を判断します。しかし、本校ではあまり生徒に新書を読ませる機会がないため、「点検読書」を応用し、「テーマ決め&テーマについて理解を深める」探究学習版の

点検読書を行いました。生徒にはいろいろな情報に触れてもらい、「自分が何に興味を持つのか」という「探究のアンテナ」を作るためのツールとして、本を活用するのです。探究学習の入門編として活用でき、いろいろな教科・テーマで行うことが出来るので、今後も授業で実践していきたいと思います。

このように、生徒と本が出会いきっかけを作ることは、生徒の心に種を蒔く作業だとも思っています。本との出会いを通して、生徒が思いがけない発見や素敵な出会いをし、得た知識や考えをじっくりと蓄え育て、いつか何か素敵なものを開花させることを願うばかりです。

(ながぬま しょうこ：埼玉県立妻沼高等学校司書)